風の吹き向ける丘

有菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風の吹き向ける丘

【Ｎコード】
Ｎ０７９３Ａ

【作者名】
有菜

【あらすじ】
クラスの女子たちの会話。それは何気ない一言からの出来事。

prologue

四葉のクローバー
クラスの女子たちから聞いた
四葉のクローバーとやらを見つけると
幸運が訪れるらしい
また
願い事が叶うらしい
クラスの女子たちに実物を見せてもらった
ハート型の葉が４枚
仲良くくっついている
四葉のクローバーには
１枚１枚に意味が込められていた
実物と似たような葉がたくさんあるところを覚えている
私は探しに行こうと思った
風の吹きぬける丘へ――――――

ploogue（後書き）

☆☆☆☆☆☆あとがき☆☆☆☆☆☆
なんか詩っぽくなってしまいました。ルキアサイドにしてみました！初の長編です！長いー！さてどこまで続くやら・・・。次の第一話まで気長に待ってやってください。

ブラウザを閉じてください。

私用

今日、死神業は休みになった。

というより、ルキアが1日中私用で出かけることになったから勝手に休みにしてもらった・・・といった方が的確だろう。

そんなわけで、久々に部屋でゆっくりとしている。

「おい、一護。姐さん追っかけなくていいのかよ？他のやつらに絡まれたりしたらどうするんだよ！」

「五月蝿い！あいつの場合は心配なんて必要ないだろ？」

せっかく久々に部屋でゆっくりできるっていうのに、なんで追いかける必要がある？

あいつは絡まれたとしても、そいつらを見抜けばすぐに払いのける。

虚だって俺も気配ぐらい、それなりに分かるし、あいつだって分かる。

なによりあの便利な携帯だって持ってるんだしな。

万一現れたとしても、ルキアがいなくてもコンがいれば死神化できるしな。

「こうしちゃいられねえ。一護、姐さんを追うぞ！」

「お、おい！ちょっと待てよ！何で行くんだよ！」

「姐さんに悪い虫が付かないようにするためだろ！その位分かれよ！早く行くぞ！」

せっかくの休みがこいつによって破壊された。

ぬいぐるみと言えど、改造魂魄が入ってるからな。

あっけなく俺は外に連れ出されてしまった。

外に出てしばらく行くと、コンがルキアを発見した。

その隣に水色がいる。

その様子から、あいつの私用は水色とどこかへ行くことらしい。

ルキアは空を見上げた。

何かを楽しそうに言っている。

少し話が聞こえる程度に近づいた。

「いい天気ですわね」

「そうだねー。そういえば、あれ見つかった？」

「ええ、昨日偶然見つけましたの」

あれってなんだ？

あれこれ考えていると、ルキア達は移動してしまったのでとりあえず考えるのは後回しにしておくことにした。

「一護、姐さんを見失うなよ！」

コンに言われて急いでルキアの後を追った。

今度はデパートに行くらしい。

気づかれないようにそーっと近づく。

ルキア達は本屋に入って行った。

雑誌でも買うのだろうか・・・・？

会話が聞こえる程度まで注意深く近づいていった。

そして手近にあったレジャー誌を手に取り、読んでいる素振りをし、会話に耳を傾けた。

「小島君、これなんかどうかしら？」

「うん、それもいいね。こっちもいいと思ったんだ。朽木さんはどっちにする？」

「じゃあ、私はこちらにしますわ」

外から見るに、あの2人はいかにもカップル的な雰囲気が漂っていた。

ルキアは外に出ると、水色と別れた。

次はどこに行くんだ？

そう思いつつ、ついていくとたつきや井上達がいた。

ルキアは井上達と近くのカフェテリアに入っていった。

誰が入ってもあまり気にならないところだったので安心した。

ルキアは席に着くと、笑いながらさっき買った本を開き、井上達に見せた。

運良くこっちの姿の見えない会話の聞きやすい席に座れたので良かった。

「この絵、凄く綺麗だね！」

「こんなの朽木さんからもらえるなんて、あいつはどこまで幸せ者なんだか」

「え、たつきちゃん、朽木さんが誰にあげるのか知ってるの？」

「まあね。でも、大体織姫も見当が付く奴だよ。本当に目立つから」

「えー、目立つ人？・・・誰？」

井上って、どこまで鈍いんだ？

「あ、そうだ。朽木さん、あれ見つかった？」

「ええ、昨日偶然見つけましたの」

こいつらもあれがなんだか知ってる。

いったいあれって何だよ・・・？

「じゃあ、これで全部だね。頑張ってね、朽木さん！」

「ええ、ありがとう」

しばらくしたあと、ルキアは井上達と別れて、家のほうへ向かっていった。

早くルキアより先に家に帰らねえとまずい。

そう思い、ダッシュで家に向かった。

全速力で走った甲斐あって、ルキアよりも先に部屋に戻ることができた。

数秒後、窓からルキアが入ってきた。

「ずいぶん長かったな」

「ああ、貴様は私が何をしていたのか分かっているだろうがな。あれだけ気配が漂っていては、いくら鈍感な奴でもすぐに気づくであ

ろう」

「俺はずっと今日は家にいた」

コンを見ると、ルキアに殺されるのが恐ろしいらしく、反論してこなかった。

「まあ、良い。ところで貴様の妹が大声で叫んでいるぞ？したい降りていかなくて良いのか？」

「やべえ、じゃあ、行って来る」

いいタイミングで遊子がきた。

今回ばかりは遊子に感謝しないとな。

それにしても、あれって一体なんだったのだろう。

今日はもう、考えるのは止しておく事にした。

空色の本

今日は私用で一人で出かけた。

昨日偶然、帰り際に四葉のクローバーを見つけた。

一護に見つからないようにそっと持ち帰り、栞にした。

今日はある本を探すため、最初に小島に会った。

「あ、朽木さん、おはよう」

「おはよう、まだ１０分も前なのに早いんですのね」

「朽木さんも早いね」

何気ない会話を少々楽しんでいた。

しばらく話していると、背後に知った霊圧が近づいてきた。

―――一護だ。

まあ、別に聞かれてはいけない話はしておらぬから、わざわざ追い返さぬでも良かろう。

「じゃあ、そろそろ行く？」

「ええ」

私達は近くのデパートへ向かった。

デパートの中は広く、綺麗に品物が整っていた。

「朽木さんて、デパートとか来たことある？」

「ええ、一度来たことがありますわ。でも、そのときはあまり回ってなくて、何がどこにあるかあまり分からないの・・・。役に立たなくてごめんなさい」

「そんなこと、誰にでもあるんだから気にしないでよ。あ、ほら。目的の場所に着いたよ」

こうして無事、目的の本が購入できた。

「じゃあ、僕はそろそろ行くね」

「ええ、あ、小島君。今日はありがとう」

「僕の方こそ、今日はありがとう。じゃ、また明日」

小島と別れ、次に井上達のところに言った。

「お待たせしてしまってごめんなさい」

「ううん、大丈夫だよ！あたしたちも今さっき着いたから」

「とりあえず、その話は中でしよう。織姫、朽木さん、皆中は言ってるから早く」

有沢に急かされて（半ば強制的に）カフェテリアに入っていった。
なぜあの有沢がこんなにも慌てているのか、入ってみて初めて分かった。
中は広く、人でいっぱいだ。
ということは、先にいってしまった奴らは・・・。
「ったく。ちづるたちどこ行ったんだよ・・・あ、いた！」
案の定、行方をくらましていた。幸いすぐに見つかったのが救いだった。
「お前らここになれてるからってすぐ入るなよ！探すこっちの身にもなれよ・・・」
「まあまあ、たつきちゃん、今日はそんな話するために来たんじゃないでしょ？」
「そういう織姫はすぐ何かしら食べてるし・・・」
「あー、やっぱり何か食べてるヒメも可愛いー！」
これはもう、本題に戻すどころではないな・・・。
「こら！ちづる！さっさと本題戻すよ！」
「ごめんね朽木さん、私とみちる以外は皆こうだから」

「鈴は止める気もしないの？」

呆れた顔で小川は国枝に問う。

「やっと騒ぎが収まったみたいだよ」

「まったく。ちづるはすぐ騒ぐから」

「それより朽木さん、あの本見せて！」

「ああ、そうでしたわね・・・。とりあえずこれが一番いいかと」

本当にこんな絵でいいのかと思ったが、一番綺麗だったのはその本だった。

「この絵、凄く綺麗！」

「こんなの朽木さんからもらえるなんて、あいつはどこまでついてるんだか・・・」

「え？たつきちゃん、朽木さんが誰にあげるか知ってるの？」

「まあね。多分大体織姫でも見当がつく奴だよ。本当に目立つから」

「えー、目立つ人？・・・誰？」

此奴、本当に鈍いな・・・。

「あ、そうだ。朽木さん、あれ見つかった？」

「ええ、昨日偶然見つけましたの」

「じゃあ、これで全部だね。頑張ってね！」

「ええ、ありがとう」

明日も休日なので感謝した。

「そういえば、朽木さんて、一護のこと好きなの？」

「あー、あたしも知りたい！黒崎君とどこまでいってるの？」

「朽木さん頑張りなさいよ！・・・ふふふ、これでヒメはあたしのものよー！」

「ちづるは黙ってろ！」

「で、結局のところどうなの？」

どうしていつの時代でも女子達はこういう話が好きなのだろう・・・。

「わ、私にとって黒崎君はですね・・・」

やっと撒くことができ、外に出られた。

多分あの次の言葉は一護には聞こえてないだろう。

そう思いながら家に戻った。

「ずいぶん遅かったな」

「ああ、貴様は私が何をしていたか分かっているだろうがな。あれだけ気配が漂っていては、鈍い奴でもすぐに気づく」

「俺はずっと今日は、ここにいた」

少々にらみ下に一護を見、コンを見た。

「まあ、良い。ところで貴様、さっきっから下で遊子が大声で叫んでおるぞ。夕食に降りていかなくていいのか？」

「やべえ、じゃ、行って来る」

そういって、一護は下に降りていった。

「ときにコン、貴様が一護を急かして連れてきたのだな？」

「うっ・・・。姐さん、その通りです・・・」

「私はそんなに危ないか？私はそんなに頼りないか？」

「い、いえ・・・」

しばらくコンを尋問して楽しんでいた。

あとで一護も同じ目に遭わせてやろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0793a/

風の吹き向ける丘

2010年10月21日20時41分発行